

タイトル：障がい者と健常者が過ごしやすい社会の答えとは

学校名・学年：天王寺学館高等学校・2年

名前：杉本 愛恵

(本文)

私には年が3つ離れた、自閉症の弟がいる。幼いころから可愛がってきた彼は今や中学生になり、身長も靴のサイズも追い抜かされたが、ちょっぴり甘えん坊なところは昔と変わらず、今でも時々ハグなどのスキンシップを求めてくる。癩癩を起こすことはたびたびあるが、兄弟どうしの喧嘩はほとんど経験していない。弟は私のことを正直どう思っているか分からないが、私は弟のことが大好きだ。

私自身、障がいを持つ弟がいる環境で育ったため、弟のことを考え出すとどうしても、本人や周りの人の意向を確かめもせずに「弟のためにこうした方がいい」と勝手に判断してしまうような、「障がい者が身近にいる人の考え」になってしまっていた。周りの人の意見を聞くと、「こちらの努力を何も知らないくせに」嫌悪感をも抱いてしまっていた。

例えば、弟が小学校入学の時。初めから特別支援学校に入学させるべきだったかもしれないのに、両親が「弟のため」と言って、特別支援学級のある地元の小学校に入学させていた。当時の私はまだ幼く、両親の言うことがすべてだと思っていたため、周りの人が弟について何か言おうと、「周りの人は私たちの苦勞を知らないからそういうことを言うてしまうんだ」という思考回路になってしまっていた。今思い返せば私のこの考え方は両親から影響されたものだったように思う。

自分が年齢を重ね、弟が普通学校特別支援学級から特別支援学校への転校が決まったこと、また、SNSなどで自分とは違う意見に目を通すようになったことにより、自分の持ち合わせていない、ほかの人の障がい者に対する価値観や感覚について考えるようになった。そして、自分を含めた世の中の障がい者に対する感じ方や考え方には、大きく分けて3つ『世間一般の考え』、『当事者の考え』、『障がい者が身近にいる人の考え』があると感じるようになった。

先ほどの、弟の小学校入学の例で話すと、「本人の意向も確認せずに物事を決めてしまうのは、親のエゴではないか」「癩癩を起すなどのトラブルが授業中にあった際、周りの生徒たちの迷惑にもなりうる」などの、『世間一般の考え』を数年前になって初めて知ったのだが、どれも今までの私にはなかった、もしくはきちんと受け入れようとしなかった考えばかりだった。

また、先日見たSNSの投稿で「障がいを持っているから何をしてもいいわけではないし、すべての行為が仕方ない、と済まされるわけではない。」「障がいのハンデを背負って生きているのは確かだが、そのハンデを背負っているからと言ってなんでもかんでも優しくしてあげるのは、それはそれで違う。特定の人に必要以上に優しくしてしまうのも、障がい者の差別になるのではないだろうか。」という発言をしている方がいたことに対し、こういった

新しい視点に色々と気づかされ、これまでの自分の言動を見直すきっかけになった。『障がい者が身近にいる人の考え』のようなものとして、今まで自分の中にあった、「周りの人は私たちの苦勞を知らないからそういうことを言うてしまうんだ」という考えも、未だに私の頭の片隅に残り続けているが、世間一般の方々からすれば「当事者のことを思って必死になってるようだけど、それは本当に『当事者の考え』に寄り添った言動なのか。空回りしていたり余計なお世話な可能性だってある。」と思っているのかもしれない。

今までの経験や、近年の考え方の変化を通して、同じ世界を生きる人でも、それぞれ意見の内容や視点、立場に大きな違いがあるため、各々の考えの本質ををきちんと理解することで、障がい者と健常者がともに、より一層過ごしやすい環境を構築していくための自分の意見を、初めて言うことができるのではないかと考えるようになった。今までのように、相手の言い分を何も理解しないままに頭ごなしに否定するのでは、単に自分のエゴを吐き出していることになりかねないと思う。

実際問題、この課題は白黒はっきりできない、グレーで、またシビアなものなので、答えを導き出すには熟考する必要があるように感じる。

私には弟がいる分、障がい者と健常者の過ごしやすい社会について幾度も考えを巡らせてきたが、未だに自分の明確な答えは出ていない。なかなか簡単にはいかないし言語化することも難しいが、時間を掛けて多くの意見に触れ、様々な人の立場について考えることで、いずれは自分の中での答えを見つけられるようになりたい。